障害者の生涯学習実践研究講座

NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR
理事長　志村　美和

【趣旨】

本事業は、令和 3 年度文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」の委託事業における『春日井市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発』の一事業として行われたものである。

この実践研究講座（全 7 回）の特徴及びねらいは、実践報告の講座内容を障害者の学校卒業後だけにとらわれず、乳幼児期から青年期まで、各ライフステージに沿った、つまり人間の一生涯を通しての育ち合い、学び合いについてとしたことである。さらに、報告を聴いて受講者がグループに分かれ、共に考える機会を作った。

【概要】

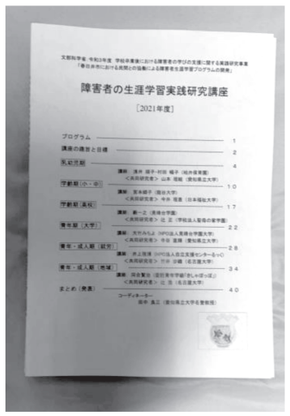
期間：令和 3 年 7 月 15 日～11 月 18 日までの 7 日間。時間は、午後 14 時～16 時の 2 時間。
受講者：春日井市職員及び、春日井市内の福祉事業所職員、主催である KIDSCOLOR の会員等が主な受講者である。

また KIDSCOLOR の HP を見て、または、講座のことを聞きつけた人からの問い合わせから受講に至った人もいて 32 名が全回受講した。尚、市議会議員、青少年子ども部部長、社会福祉協議会総合支援課課長が毎回参加していたこと、単発で受講した人を含めると全 7 回で計 47 名（延べ 173 名）の人が参加した。受講者の所属は以下の通り。

1．受講者の職種

春日井市役所職員	7 名
春日井市内公民館・ふれあいセンター職員	9 名
福祉事業所職員	3 名
KIDSCOLOR 会員	6 名
その他	7 名

＊その他は、社会福祉協議会、幼稚園教諭、支援員、大学関係者、名古屋市委託青年学級、親の会代表等の参加であった。



障害者の生涯学習実践研究講座冊子

2．講座のプログラム

第 1 回	乳幼児期	幼保連携型認定こども園柏井保育園	浅井　順子・村田　暢子
	共同研究者	愛知県立大学	山本　理絵
第 2 回	学齢期（小・中）	龍谷大学（元小学校教諭）	宮本　郷子
	共同研究者	日本福祉大学	今井　理恵
第 3 回	学齢期（高校）	見晴台学園	藪　一之
	共同研究者	学校法人聖母の家学園	辻　正
第 4 回	青年期（大学）	NPO 法人見晴台学園大学	大竹　みちよ
	共同研究者	愛知県立大学	寺谷　直輝
第 5 回	青年・成人期（就労）	NPO 法人自立支援センターるっく	井上　雅博
	共同研究者	名古屋大学	竹井　沙織
第 6 回	青年・成人期（地域）	委託青年学級「きしゃぽっぽ」	河合　賢治
	共同研究者	名古屋大学	辻　浩
第 7 回	まとめ	NPO 法人春日井子どもサポート KIDSCOLOR	志村　美和
		愛知県立大学名誉教授	田中　良三

尚、実際は、緊急事態宣言が出されていた期間は、会場が使用不可だったため、第 4 回、第 5 回の講座が延期となり
、第 6 回が先に開催された。

講座の流れ：実践報告＜40 分＞→共同研究者講話＜20 分＞→＜5 分休憩＞→4～5 人ずつのグループに分かれて実践報告についての意見・質問をまとめる＜20 分＞→各グループで出た意見・質問を発表＜10 分＞→コーディネーターのまとめ＜10 分＞→振り返りレポートの記入＜15 分＞→終了。グループは毎回シャッフルし、毎回できる限りいろんな立場の人の意見が聴けるようにした。また、毎回講座の振り返りレポートを提出してもらった。

3．各ライフステージの実践報告からの学び

ライフステージⅠ乳幼児期は春日井市で古くから統合保育、仏教保育、縦割り保育を特色とした保育を行っている柏井保育園の報告だった。「人は一人では生きられない」「人生とは Now&Here の積み重ねである」そしてそれは「楽しい瞬間」の積み重ねでありたい、という理事長の強い理念の元、健常児と障害児が一緒に生活をするインクルーシブ保育を行っている。子どもたちはもちろんのこと、保育者も保護者も一緒に育ち合う。クラスで困っている子どもがいれば、担任だけでなく全職員で考えを出し合い、共有する。保護者にも協力をお願いし、一緒に考えていただく。常にそういうスタイルで保育を行っている。

事例を２つ挙げられ、①入園したての障害児と年長児とのトラブルを通しての育ち合いについて②3 年保育を通してゆっくり自己決定（主体性）を育ててきた障害児の就学に向けて小学校にどう育ちの連携をとっていくか、についての報告があった。

ライフステージⅡ学齢期（小・中学校）は元小学校教諭から、通常学級における特別な支援を必要とする子との関り、学級集団作りについての報告だった。5 人の子どもの事例を通して、担任が丁寧にかかわり、子どもに寄り添い、共感し、学級集団を作り上げていくいきさつをわかりやすく話された。子どもの見えている行動に振り回されずに、子どもの内面を探り、発達課題に合った取り組みをすること、子どもの好きな事や得意なことを大事にした取り組みを学級活動に取り入れていくこと、また、子どもの持っている力を引き出すこと、発達の土台となる力を育てることが大切であることを学んだ。結びに、大切なことは子どもが教えてくれる、大人・教師も子どもから教えられ、自己修正しながら成長発達していくのだ、と締めくくられた。

ライフステージⅢ学齢期（高校）は NPO 法人が運営する 5 年制高等部と中等部を設置するフリースクール「見晴台学園」からの報告だった。5 年制高等部とは、高等部前半の本科 3 年間の後、高等部後半として専攻科 2 年間に進むことである。発達障害や軽度の知的障害を持つ生徒 2 名の事例を通して、高等部に 2 年間のプラスαの学びの時間が保証されることが本人たちにどのような力を育むことにつながるのか、今回の事例では特に「見通しを持つ力」の大切さについての話があった。学生たちが主体的に、楽しく学び、豊かな生活を送るための時間と環境を学生たちに合わせて保証し、自ら動き出すきっかけとなる働きかけや仕掛けを授業や行事（TKD53）の中に取り入れていた。

ライフステージⅣ青年期（大学）は 2013 年 10 月に開校した、見晴台学園大学の報告だった。本事業のコーディネーターの田中良三氏が学長を務めている。学校教育法に則らない「大学に相当する高等教育機関」という位置づけでいわばフリースクールの大学版といったところであるようだ。「現代を生きる青年にふさわしい教養」「幅広い視野を持ち、意見を表明する力」「人とつながり仲間を作る力」を目標とし、自分らしく豊かな人生を生きるために学ぶ場であることが報告された。

学びの特徴としては、少人数によるゼミナール形式の講義で講師との距離が近いこと、評価と成績については、教授だけでなく、学生自身も自己評価し、教授に対してのお願い等を含む授業の評価をすること、サブティーチャーを配置し、学生の生活面のフォローもすること、研究生制度と卒業生支援を設けていること、共同研究校と遠隔授業等で交流がある、などであった。

ライフステージⅤ青年・成人期（就労）は、学校卒業後の青年たちの就労と生活を支援するために２００１年に開設された自立支援センターるっくの報告だった。主に、2017 年から開催している「学校を卒業しても、社会人になっても学べる機会」として当事者による当事者のための

『生涯学習セミナー』についての話を伺った。生涯学習セミナーの実行委員会に当事者である学生や社会人が加わり、運営や企画にあたっている。委員会の中で教職員も、関係者も当事者もみな対等な関係でそれぞれ役割を担い、準備や当日の運営を行うこと、この過程がまさに生涯学習の場として捉えている。

ライフステージⅥ青年・成人期（地域）は、名古屋市で 38 年の歴史を持つ、ボランティアサークル「汽車ポッポ」の実践報告だった。汽車ポッポでは、月 1 回行事を開催している。行事内容については、学級生の要望を聞き、毎年新しいプログラムを取り入れることで、新たな経験ができることを目的としている。これは、ボランティアの力量を挙げることにもつながっている。学級生も運営側に回ることで、自覚が持て、青年学級が自分たちの居場所となっている。月 1 回だが、学級生にとっては生活の一部となり、社会人としても成長している、という報告だった。

実践研究講座まとめの日には、本事業のコーディネーター田中良三氏から総括として、障害者の生涯学習の今後の推進方策についての話を受け、まとめのグループワークを行った。

今年度の実践研究講座では、各ライフステージを 6 期に分け、乳幼児期から青年・成人期までそれぞれ素晴らしい取り組みを行っている団体、人から実践報告を行ってもらった。また、それぞれに共同研究者として、各ライフステージにおける研究者からの理論的解説や歴史的背景等を助言いただいた。受講者は、「インクルーシブ保育」という言葉を初めて聞いた、という人もいた中で、乳幼児期・学齢期における子ども同士の育ち合い・学び合い、主体的な活動を支えるための支援者・指導者の在り方、青年期以降の自ら考え、行動する、企画・運営に携わる等学び方や時間の使い方について学び、それをさらにグループワークで深めることができた。

【結論】

この 7 日間の障害者の生涯学習実践研究講座により、官民が同じテーマに沿って話を聴き、また同じ議題について話し合うことで自分のフィールド以外の話が身近に聞けたこと、新たなネットワークが広がったことが成果として考えられる。そこから自分のフィールドに戻って何ができるか、考える機会となった。

課題として挙がってきたのは、現在この春日井市には学校卒業後の学びの場はなく、支援学校を卒業したら就労が当たり前で、学び続けるという選択肢は当事者及び当事者家族の中で思い浮かばないないのが現状である。さらに、行政や障害者の相談を受ける事業所側の情報共有や情報貧困、学びの場を作ったとして移動支援は保護者に係ってしまうのか、支援者・理解者の養成をどうしていくか、等検討事項が山積していることがわかった。

しかし、確実に『障害者の生涯学習』の必要性、自分たちでも何かできるのではないか、という希望と期待が受講者を含め、関係者の中で大きくなったことは間違いないだろう。

春日井市ドリームサッカーフェスティバル

FC.FERVOR 伊藤貴治

【趣旨】

全ての人がお互いの違いを認め合い、障がいのあるなし関係なく地域の中で当たり前に生活が出来る。それがインクルーシブ社会の実現だと考えています。

しかし、学校教育や就労の場面以外での生涯を通した学びや生きがいを見つけようとした時に障がい者が制度の間に取り残されている現状がある。行政主催のイベントでも民間主催でも同じ事が言え、学校卒業後の障がい者の学びの場が著しく少ない為、行政・民間一体となって学校、就労以外の受け皿の整備を進めていくことが必要です。本サッカーフェスティバルがそのきっかけの一つとなることを目指します。

【概要】

１．FC.FERVOR

FC.FERVOR は春日井市をホームに３０年続く地域に根付く全国でも名の知れるサッカークラブです。対象は幼・小・中学生で、サッカーの技術向上はもとよりサッカーを通じた人間性、自己研鑽、仲間との集団体験などの経験において子供たちの持つ可能性を引き出す事を目指しています。プロ選手も多数輩出し、卒業生は各分野でここでの経験を生かして活躍しています。

FC.FERVOR では、保育園や放課後等デイサービスと連携して、発達に心配のある児童又は障害のある児童とそのご家族の方をスポーツを通して支援していくプログラムを週 3 回行なっています。スポーツを通し発達に必要な多種の運動機能・基礎学習・ルール学習・躾などの要素を積み重ね、指導・訓練していく事で身体能力の向上を図り、日常生活動作や集団適応性を身に付け、将来の自立と社会参加を高めていく基礎となる療育サービスの提供をしています。

２．活動報告

本年は 10 月 10 日（日）・10 月 24 日（日）・11 月 7 日（日）の 3 回実施。場所は FC.FERVOR が持つ春日井インターフットサルクラブで行った。募集人数は 15 人程度。

３．参加者の背景

春日井市内にある春日台特別支援学校、春日井高等特別支援学校、その卒業生等。

４．ボランティアの背景

中部大学伊藤佐奈美先生のゼミ生を中心に教員免許取得もしくはそれを目指す学生５名ほど。

５．活動で大切にしていること

参加者同士が偏ったペアでのメニューにならないことと失敗してもチャレンジする事を褒め合える雰囲気づくり。また、保護者もスポーツを通じて、体を動かす場とともに交流のきっかけにしてもらえればとの思いから、３０分間は保護者が参加出来る場を用意しました。また、来た方の運動レベルに合わせて、メニューを組んでいく事。

６．課題

当日までどんな方が参加されるのか分からず、どんな内容を組むかも悩んだ。来た方の運動レベルに合わせその場での対応になった。参加者の場慣れや不安感の解消に学校との連携と継続性が必要だと感じました。また、学校側のイベントスケジュールが重なり十分なスケジュール調整が出来ず、ほぼ在校生の参加がなかったこと。その他、連携協議会の中での意見で、保護者の参加に対して、保護者がいつまでも関わり続けなくちゃいけない環境は良くないんじゃないか。という意見や講座に参加する際の移動手段の確保に関しても課題を共有した。

７．課題の解決に向けて

参加者の場慣れや不安感の解消に学校との連携と継続性が必要だという認識が学校ともされ、来年度講座とは別で学校の授業の中で、講師に来てもらいイベントを実施してみようという話を頂きました。次年度以降は、学校での実施経験によってより参加しやすい場の提供ができるのではないかと考えています。

また、ＦＣ.ＦＥＲＶＯＲとしても今後、障がい者向け講座の拡大を現在検討中で、民間事業者による場づくりが一つ広げられそうです。

８．活動の成果

参加者の声　槇原啓太さん

学生ボランティアの声

・実際にみんなで楽しんで体を動かすことで、よりコミュニケーションがとりやすいと感じた。

・参加する前は、障害の持った子とどう接するべきか不安もあったが、参加したことで接し方の勉強にもなったし、活動を一緒に取り組むことで心を開いてくれるということを知ることができた。

・障害を持つ方に対する壁が無くなった。

・サッカーにもバドミントンにも参加させていただきましたが、参加者の方々と一緒に楽しませていただきました。障害のある方と関わる機会がほとんどないまま特別支援の免許を取るため、かなり不安がありました。しかし、この講座に参加し、スポーツを通してたくさんコミュニケーションをとることができたことは、私の中でとても貴重な経験になりました。ありがとうございました。

【結論】

障がい者にとって支援学校卒業後の一生涯の学びの場を確保し、定着、生活していく上での楽しみになっていくには、今後も継続していく必要があると考えます。障がい者、健常者共に経年での意識の変化や対応を見ていく２年目以降、一般参加者の参加も募り、障がいの有無に関わらず混ざり合える共生社会の実現に向け、サッカーを通じて相互理解の機会をつくる必要があると感じました。

初めてのバドミントン教室を開催して

安藤　志津子
（にこにこ北城クラブコーチ）

【趣旨】

にこにこ北城クラブは、「勝つことにこだわらず、親子でバドミントンを楽しむ」ことを目的にして地域の子どもたちやその保護者とバドミントンを楽しんでいる団体である。指導者は、特別支援学級の担任経験者、市内の中学校のバドミントン部活指導助手などで、指導者の全てが子育てを終えた主婦という団体である。将来は、障がいのある子ども、不登校の子どもやその保護者がバドミントンを楽しめる機会を作ろうと考えている。指導者が KIDSCOLOR の講座に参加させていただいた縁で「初めてのバドミントン教室」の委託を受けた。

今回、バドミントン教室の実践活動を振り返り、感想と課題について報告する。

【概要】

1．活動内容　　＊場所はレディヤン春日井、時間は 9：30～11：30

日時	参加人数（保護者）	コーチ	学生	スタッフ	合計
11 月　3 日（土）	6 人（3 人）	7 人	6 人	4 人	26 人
11 月 20 日（土）	14 人（5 人）	7 人	6 人	4 人	36 人
12 月　4 日（土）	8 人（5 人）	7 人	6 人	4 人	30 人

2．教室の成果

3 回という少ない回数ではあったが、参加者の上達は、想像を上回るものであった。どの参加者も笑顔でシャトル（羽根）を打ち合うことができ、笑い声が溢れる教室となった。

そのような雰囲気で開催できた要因としては、第一にコーチ陣が臨機応変に動いてくれたことだった。参加者は「障害がある方」ということしかわからない。どのような支援が必要なのか、普段の運動量はどのくらいなのか、指示の出し方に工夫が必要なのか、等々。事前の話し合いでは、なかなか練習計画が立てられず、当日の参加者をみて、臨機応変に練習計画を進めていくことにした。ただ、安全面を最優先に考え、参加者の動線やグループ分け、ボランティア学生への指示の出し方などについては、コーチ陣で共通理解を図った。初日は、参加者の様子を見ながらの練習内容を考えながら行った。手探りであったが、練習内容をコーチ陣と話し合いながら進めていった結果、最終日には、簡単なダブルスの試合を行えた。

スポーツのコーチは、上手になること、勝つことを意識しがちだが、今回参加した 6 人のコーチ陣は、全員が「安全に楽しむこと」を 1 番に考えて、ラケットにシャトルが当たることを褒め続けくれたことが素晴らしい結果につながった。

第 2 の要因としては、ボランティア学生の明るく、素早い行動である。コーチ陣、スタッフと

参加者だけでは、「教える側と教えられる側に分かれた教室」をボランティア学生が「みんなで楽しむ教室」に変えてくれた。同年代の若者が一緒に楽しむことの大切さや指導者としてボランティア学生を活用できる練習メニューを考えることが必要だと学ばせてもらった。

第 3 の要因としてあげられるのは、保護者の参加であった。同じことを経験して同じ目線で褒めたり、喜んだり、悔しがったり・・・。微笑ましい笑顔にあふれたのは、指導者にとっても幸せな経験だった。

しかし、いくつかの課題も浮かび上がった。まず、参加者の募集やアンケートがスムーズに行えなかった。チラシを作成する従来の方法だけでなく、SNS を利用することが必要であった。

また、計画をしても体育館を確保することが難しかった。

【結論】

今回のバドミントン教室は、障がい者や保護者にとってとても有意義なものだったと考えている。しかし、実際に継続的なバドミントン教室を開催していく場合、体育館の確保は、行政の協力が不可欠であると考える。また、安全に楽しくバドミントンを行うためには、指導者やボランティアの増員や意識改革が必要であり、この場合も行政の援助が無ければ、保護者や当事者に金銭的な負担を強いることになる。継続的なバドミントン教室を開催するためには、行政や企業などの協力が必要であると考えている。

Ⅲ. 総　括

＜総括＞

田中良三（本事業コーディネーター）

1. 文部科学省による学校卒業後の障害者の生涯学習支援政策の推進

文部科学省は、2016年12月14日、2017年度から、これまでの障害児の学校教育政策から、障害児・者の「生涯学習」政策へ転換を図ることを表明した（松野博一文部科学大臣「障がい者支援の総合的な推進に関する大臣講話」及び特別支援総合プロジェクト タスクフォース「文部科学省が所管する分野における障がい者施策の意識改革と抜本的な拡充～学校教育政策から『生涯学習』政策へ－」である。そして、これらの基本方針をもとに、2017 年度は「障害者学習支援推進室」を設置し、省内の関係予算を整理し、また、新たな政策方針の立案や学校卒業後における障害者の学びに関する有識者会議を立ち上げ、財源の確保など政策化に向けて基礎的整備を行った。そして、2018 年度から、「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」等（予算1億6百万円）新たな政策の具体化＝事業が図られ、継続・拡充されて今日に至っている。この政策推進の基になっているのが、2019年3月の有識者会議『障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―』と題する報告書である）。ここでは、特に重視すべき視点として、⑴ 本人の主体的な学びの重視、⑵ 学校教育から卒業後における学びへの接続の円滑化、⑶ 福祉、労働、医療等の分野の取組と学びの連携の強化、⑷ 障害に関する社会全体の理解の向上、を挙げている。

これらは、障害者の生涯学習支援のあり方について、障害者権利条約や障害者差別解消法にもとづき、近年のわが国の実践状況を踏まえた画期的な政策である。

２. 各発表の特徴と課題

今回の春日井と瀬戸の事業の大きな特徴は、春日井における「障害者の生涯学習実践研究講座」（全７回）である。この講座では障害者の学校卒業後だけにとらわれず、乳幼児期から青年・成人期まで、各ライフステージに沿った、人間の一生涯を通しての育ちと学びについて取り上げたことである。各回、実践報告と共同研究者によるコメントと、そのあと参加者によるグループワークと発表があり、最後にコーデーイネーターがまとめを行った。実践報告者と共同研究者への質問事項は、それぞれ文書で回答していただき次回にプリントして配布した。

当初は、本事業は「障害者の学校卒業後」を対象にしたものであり、なぜ、乳幼児からとりあげるのかという疑問もあった。しかし、ほとんどの受講者は、障害児はこれまでどこでどう育ってきているのかについてほとんど知識や理解がないなかで、突如、学校卒業後といわれてもなんのことかわからず、この講座によって、それまでの生い立ちや現状を理解することで学校卒業後の学びの必要や課題認識にスムーズに繋がり易いことが明らかになったことである。

もう一つの特徴は、春日井と瀬戸が合同で実施した視察研修である。県内では、昨年度までの３年間本委託事業を受けた見晴台学園と見晴台学園大学を計６回にわたって実施した。学びの実際と生徒・学生・教員・保護者との交流・懇談は、ありのままの障害青年の日常の姿と各人の率直な思いに触れ、視察者の心を打った。また、県外では、東京都町田市の障がい青年学級（ひかり学級）と 0B の青年学級（とびたつ会）にそれぞれ参加した。いずれも午前 10 時の始まりから午後４時までの終わりまで、またその後職員との１時間ほどの懇談含め、視察研修は長時間にわたった。しかし、参加者は、このような長時間にわたる研修は初めてであったが、皆一様に、それが良かったという感想だった。というのは、障がい当事者一人ひとりを大切に取り組もうとすれば、このような１日がかりになることなど、実際に参加してはじめて感得できることであり、障がい者の学びの実際に初めて触れて学ぶことができた、支援者の関わりかたについて学んだ、このように大変感銘を受けた視察研修の学びは、あらためて視察研修の大切さやあり方について考えさせられた。

次年度は、瀬戸では、ボッチャ大会をよりきめ細かに地域毎の開催を通して、障害のあるなしにかかわらず、共に楽しみながら、地域住民による障害者理解やインクルージョンを目指していくことや、公民館職員やボランテイアを対象とした連続講座の実施が考えられる。